
ダメ人間更正委員会

メロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメ人間更正委員会

【Nコード】

N9737S

【作者名】

メロ

【あらすじ】

高校三年生の真上圭太が所属する委員会「ダメ人間更正委員会」は彼とその同級生、室橋舞子の二人で構成された委員会である。その目的は、人間的欠陥を更正すること。そんな委員会に、悩みを抱えた一人の後輩がやって来て・・・

より多くの意見が欲しく、他サイトにも投稿しました。

『サイレントガール』(前書き)

初めまして。メロと申します。

初めて書いた作品なのでへたくソかもしれませんが、どうか最後まで読んでいただけるとうれしいです。

〜サイレントガール〜

ブローグ

(はぁ、もうこんな時間か)

放課後、ため息を一つ吐き出すと、机の中身を無造作に引き出す。中にはいつもの手紙が入っていた。

(……今日も来てる。)

俺の机にはいつも決まってラブレターが入っている。きっと、皆が学校に来る前に入れているのだろう。俺はそれに返事を書くこともある。かれこれ、もう一年も続いていることだ。自分で言うのもなんだが、なかなかうまくいっている。それを読み終わると、俺の通う高校のある扉の前に立つ。

「失礼します」

コンコンと扉を二回ノックすると、ドアノブに手をかけ扉を開く

……

バツコーン!

「ぐはぁ!」

手間が省けた。何せアホみたいな安っぽい音を立て、こちら側に扉が勢いよく開いたからである。(実際そのアホみたいな音は俺が扉に突き飛ばされた音だが)この扉自動だったっけ? なんて事を考えていると、扉を開けた張本人が出てきた。

「遅かったじゃない。既に委員会は始まっているわ」

「ふざけんな! ちゃんとノックしたのに何で開けたんだよ!」

「それは最近あなたの遅刻が多いからお仕置が必要だと思ったからよ。このために、わざわざ扉を改造して強度を上げたのに。感謝しなさい」

この超絶悪魔女は俺が所属している委員会の会長「室橋 舞子」
（むろはし まいこ）身長158？。体重は……見た限りスレンダー
なので重くは無いだろう。胸は揺れるほどは無いが貧乳という訳
でもない。微乳といったところか。肩甲骨まで伸びる黒髪が風にな
びくロングヘアの美少女。ちなみに俺と室橋は同じ高校3年生だ。
いきなり同級生の乳について冷静に分析してしまっただが、そんなこ
とはどうでもいい。内面はと言うと、先ほどの行動からも分かるよ
うに、凶暴。その一言だ。いや、どちらかという狂暴かも。
そして、そんなあわただしい雰囲気の中、委員会が再開する。俺
や室橋を含むメンバー（二人だけ）が席に着く。

今日も始まる、ダメ人間更正委員会が。

一章・・・委員会の趣向

「では、改めて委員会を始めます」

室橋が空気を整える。（てか俺が来るまで何してたんだ）先ほど
の扉の先の教室には、手前に黒板が一つ、俺が自宅から持ってきた
パソコンが一台あるだけの粗末な部屋だ。黒板にはこう書いてある。

お互いの人間性の弱点を見つけ、正し合おう。

この「ダメ人間更正委員会」は、その名の通りダメ人間がダメな部
分を更正して行こうという委員会（仮）だ。

「じゃあ、遅刻してきた『真上 圭太』（まがみ けいた）君。な
にか意見はあるかしら？」

「室橋は静かに戸を開けたほうがいいと思いました」

「今日から新しいメンバーが増えるわ。こちらへ来なさい」

「俺の意見無視してんじゃねえ！」

そんなやり取りすら無視して教室の隅っこにいたらしい少女が前に出てきた。小柄で身長の低い少女だ。黒くて綺麗な髪で目が隠れているが、めがねをしているようだった。室橋は言葉を続ける。

「自己紹介を」

「……」

少女は黙ってうつむいていた。制服のリボンが赤なのできつと1年生だろう。ちなみに2年生は青、3年生は緑という風に色分けされている。男子の場合はネクタイだ。

「どうした緊張してるのか？」

俺なりに優しい口調で語りかけてみる。するとこちらを向いていた少女は振り返り、黒板に何か書き始めた。

玉音 たまね 琴葉 ことば

彼女の名前だろうか。どうしてしゃべらないのだろう。そんな俺とは正反対に室橋は何一つ疑問を抱いていないような様子で、

「この子は自分で喋ることが恥ずかしくて出来ないの。つまりある種のダメ人間ね」

まあ、どこがダメなのか分かってるだけマシだけど。と室橋は付け足す。

「で、それを更正する為にここへ？」

俺は玉音に質問する。コクツと彼女はうなずいた。どうやら本当に喋らないつもりらしい。

「おい、じゃあ授業とかどうしてんだ？」

「首を傾げて、それでうつむく。その一点張りよ。どの教科の先生も呆れて彼女には、かけないらしいわ」

「なるほど、しかしそんなことが通用するのかよ」

「質問攻めもそこそこにあなたも自己紹介したら？」

「……そうだな。俺の名前はさつきも聞いたと思うが真上 圭太っ

ていうんだ。先輩だからって気を使わなくてもいいからな」

身長・体重共に平均的。髪形もある程度整っているつもりだ。そんな俺がなぜこの委員会にいるのかというところ……それはまた今度の機会に話すとしよう。

「で、何で喋れなくなっちゃったんだ？」

やはり玉音はうつむいたままだった。

「何回聞いても答えてくれないのよ。それが分かれば少しは話が進むのに」

ため息交じりに室橋は答える。そして続ける。

「まず、信頼関係を築くために二人でデートしてきてちょうだい」

「……え？」

「聞こえなかったの？耳に指を突っ込んで脳をマッサージしてから聞いて？」

「俺がバカだつて言いたいのか!？」

こうして、俺と玉音は出合つて数分でデートの約束を取り決めた（取り決められた）のであった。

二章・・・デートの行方は

その週の日曜日

（学校の前に九時集合か）

なんだかんだ言つてもやはりデートは気合が入る物で、どんな服を着ようか迷ったのだが、

「あつ、言い忘れたけど服装は制服よ。他の生徒とも喋れるように、制服姿に慣れてもらわないといけないから。それに彼女もあなたの私服なんて見たくないでしょうし」

と、室橋から少々毒のあるアドバイスを頂いた。もちろん玉音も制服だろう。

ブーブーと携帯電話が鳴る。

(玉音からかな?)

玉音とは喋らなくてもコミュニケーションが取れるようにメールアドレスを交換した。メールにはこう書いてあった。

「今、真上先輩の後ろにいます」

寒気がしたので急いで後ろを振り返る。

そこには私服姿の玉音がもじもじしながら立っていた。

(か、かわいい!)

なぜ彼女は私服なのか、そのメールどこのホラーだよ!等の突っ込みとか、そんなことはどうでも良かった。思わずじっくり玉音を見てしまった。

その容姿は恥ずかしがり屋を連想させる物ではなかった。ヒラヒラのレースのついた白の丈が短いワンピースを着て、水色の薄い上着を羽織っていた。そして何よりの特徴だったためがねを外し、前髪が整えられて目が見えるようになっていた。

(とにかくなんか言わなきゃ!)

「よ、よう」

「.....」

(何緊張してんだよ俺え!いいか、これは更正プログラム。マジデートじゃないんだ!)

「えーと、どこ行こうか?行きたいところとかある?」

「.....」

(うわああああ! 質問しても返してくれねえんだっただあ!)

とか思っ、あたふたしていると携帯が音を立てた。メールだ。

『遊園地に行きなさい』

室橋だ。まるで監視しているかのようなタイミングでメールを送ってきた。まあ確かに、遊園地に行けば絶叫マシーンやお化け屋敷思わず声が出てしまうようなことばかりだ。どうやら玉音のところにも同じメールが来たみたいだ。

「じゃあ、行くか」

玉音は小さくうなずいた

「よし、着いたぞ」

歩くこと数十分、ようやく遊園地に着いた。学生割引の優越感に浸りながら遊園地のゲートをくぐる。

「結構人がいるもんだなあ。よっよし、はぐれると悪いから手つなぐか」

（うはー！言っちゃったよ。女の子相手に！ 心臓飛び出すかと思っただ！）

玉音はいつもよりさらに小さい動きでうなずくと、僕が差し出した手を握ってきた。

（幸せすぎて昇天しそうだあ。ハッ！ 違う違う、普通にデートを楽しむところだった。これはあくまでも更正のためのプログラムなんだ）

「とりあえず、ジェットコースターでも乗ろうか？」

いつものように小さくうなずいた。（以降『』内の言葉はメール）
「うわっ、かなり並んでるよ。どうするほかのところに行くか？」

『わたし、これに乗りたいです』

メールで返事が返ってきた。なかなか斬新なコミュニケーションのとり方だな。

「もしかしてジェットコースター好き？」

『はい』

（よっしやあ！ 会話？ が成立してる！ でも、問題は喋ることなんだよなあ）

次のお客様。

「おつ、俺たちの番が来たぞ」

それでは、発車いたします。

「ぬわあああああああああ！」

もちろんこれは俺の声だ。玉音はと言つと相変わらず無言を貫いている。こいつマネキンなんじゃねーか？ そんなことを思っている内にジェットコースターが終わった。俺の先輩としての威厳と一緒に。

「もう十二時回ったのかおなか減ってない？ 昼でも食べに行こうか」

『はい』

俺たちは最寄りのレストランに入った。

「なんでも好きなもの頼めよ。今日は俺がおごるからさ」

『そんな、先輩に悪いです』

「遠慮すんなよ。先輩の言うこときいとけ」

すると玉音は小さくうなづく。

「そ・の・代・わ・り。注文は玉音が取ってくれよ」

玉音はおどおどした様子で落ち着かなくなってしまった。

ピンポン店員を呼びため呼び鈴を押す。

「はい。お呼びでしょうか？」

「……………」

「お客様？ 具合でも悪いんですか？」

すると玉音は意を決した表情になって

無言でメニューを指差した。

(どこまで喋りたくないんだよ……………)

半分あきれ返っているとメールが来た。

『これから私は、ある作戦を実行するから注意していなさい。あなたがやることは一つ。玉音ちゃんのことを着信拒否に設定しておく』

なさい。それじゃあ」

(室橋か、何をする気だ?)

疑念を抱きながらも玉音を着信拒否にする。心が痛い。重症だこれ。

どうやら玉音にもメールが来たようだ。多分、室橋からだろう。

それにしてもメールを見てからどうも玉音の様子がおかしい。ちらちらと、こちらを見てはまた携帯に視線を落とす。さっきからその繰り返しだ。

「お待たせいたしました」

料理が運ばれてきた。しかし、そんなことも気にせずに携帯をいじっている。これは完全に推測だが、俺にメールを送っているのだろう。

(くう、胸が痛い)

「どうしたんだ?とにかく飯食べようぜ」

「……………」

はあ、まただんまりか。もう慣れたけど。

「……………」

「えっ?」

「……………」

「ええええええええ!?!」

そう告げると玉音は店を出て行ってしまった。「ブルブル」電話だ。室橋か?

「もしもし、そっちはどんな感じかしら?」

「どんな感じかしら? じゃねーよ! 玉音にどんなメール送ったんだ!」

「どんなって、あなたがなぜ、この委員会に所属しているのかをよ

「なっ…………! 何でそんなこと!?!」

「あなたパソコンに全部保存するなんて、意外と几帳面なのね」

「勝手に見てんじゃねえ!」

「じゃあがんばってね」

ツーツー

(くそっ！)

俺がこの委員会にいる理由。

それは、俺が室橋を好きだからだ。

そしてもう一つダメ人間としての理由。向こうにはもう、そのことを知られているのに、自分の口で伝えられない意気地なしだということ。しかしそれだけでは玉音が怒る理由がない。でも、彼女は怒った。

なぜなら、彼女は俺にずっとラブレターを送っていた人物だからだ。

黒板に名前を書いた時にすぐわかった。何通も何通も、やり取りをした相手の字だから。わざわざスキャナーを通して保存するほど大切にしておいた物だから。意気地なしの俺は表面上、彼女に気があるかのように手紙を返し続けた。手紙を返す勇気はあっても、手をつなぐ勇気はあっても、大事などころで何も出来ない意気地なし。そんな俺を彼女は好きであり続けた。今回委員会に来たのも俺と喋れるようになるためだろう。いつか会っておしゃべりしたい。そんな手紙もあった。

(とにかく今は彼女を探さなきゃ！)

終章・・・今回の結末

「はあ、はあ、はあ、見つけた」

「……………」

彼女は園内にある湖の近くのベンチに腰掛けていた。

「悪い…… 謝って許してもらおうなんて思っていない。でも、でもこうしなきゃ俺の気持ち収まらない」

玉音は少し間を置いて、

「私、一人で浮かれていました。先輩とお話できるって、二人きりでデートだって」

玉音は小さい声で語り始めた。こんな時、こんなことを思ってしまつのはどうなのだろうか。

「お前の声、可愛いな」

本来であればここで言うべきことではなかっただろう。しかし、思わず言ってしまった。

天使のような甘い声の持ち主、玉音はこう返す。

「自分で言うのもなんですけど、昔よく言われてたんです。大人からも小学校の同級生からも、でもいつの日か私に対するみんなの態度が変わったんです。『わざとあんな声だして気持ち悪いな』とか『ぶりっ子すんな！ 気持ち悪い』とか、ついには親まで『もう、いい加減にその声やめてくれないか、感に触るんだよ！』なんて言われて、それから喋ることが怖くなったんです。また嫌われるなんて思ったら喋られなかった」

「俺は、俺はそんなこと思わない。俺はお前の声好きだよ。これは俺の本心だ。勇気出して話してくれてありがとう。ゴメンな皆と喋れるようにしてあげられなくて。本当にゴメン、ずっと、騙してて」

「もういいんです。今日、先輩と一緒にいられて、一緒におしゃべりできて、本当にうれしかったです。それに私、吹っ切れました。先輩にこの声好きって言われて。先輩とならもう喋れますから」

そういつて彼女は笑顔を作った。優しい笑顔。涙の跡が残る優しい優しい笑顔。

断章・・・その後の委員会

（はあ、もうこんな時間か）

机の中に手紙は無い。

放課後、ため息を一つ吐き出すと、いつもの扉の前に立つ。

「失礼します」

コンコンと扉を二回ノックすると、ドアノブに手をかけ扉を開く

……

ズッコーン！

「ぬはあ！ くそっ扉は静かに開けろって言ったただろうが！」

「何を言ってるの？ あなたが更正に失敗したからお仕置きしただけよ。結局あの子は皆と喋れないまま。」

あなたを除いてはね」

「先輩、大丈夫ですか？」

「ああ、だいじょう……」

「大丈夫だと思うわ」

「なんでお前が答えてんだよ！」

委員会にダメ人間が一人増えました。

完

〜サイレントガール〜（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

僕はキャラクターの個性が出せればと思って書いたのですが、どうでしょう？

ぜひ、感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9737s/>

ダメ人間更正委員会

2011年5月3日23時40分発行